

「2015 年度アジア SEND 派遣助成参加報告書」

京都大学文学研究科 修士課程1年 水野 輝之

①学習成果

今回の派遣では、(i) 現地大学における日本語授業の TA と文化交流事業への参加、(ii) 修士論文執筆の2点を活動の軸とし、それぞれに関して次のような成果を上げた。

(i) に関しては、NUS の Center for Language Studies の教員の先生方のご厚意により、日本語初級クラスに TA として講義・チュートリアルに参加することが出来た。NUS では日本語の人氣が非常に高く、特に初級のクラスは登録者数が300人を超えるほどであった。授業外においても、毎週金曜日の午後に行われる Japanese Café という取り組みにも毎回参加し、日本語を学ぶ現地の学生と様々なゲームを通じて交流することが出来た。教員の先生方は日本語それ自体だけでなく日本文化も併せて学ぶことが出来るような授業工夫を積極的に取り入れており、それらのアイデアは将来自分自身が言語教育に携わる際に非常に参考になりうるものであった。

(ii) に関しては、主に NUS 英語学科の Yosuke Sato 教授と Michael Yoshitaka Erlewine 教授に指導を受けた。Sato 教授からの統語論の最新の知見からの指摘は、理論的な知識を一層深めるものとなった。形式意味論を専門とする Erlewine 教授からの指摘は、統語論を専門としてきた自身の研究に大きな幅を持たせてくれるものとなった。特に Erlewine 教授とのディスカッションを通して分析を深めた研究内容は、最終的に共同研究という形で今後いくつかの学会に提出する予定であり、今回の派遣における最も大きな成果の1つとなった。他にも、Mie Hiramoto 教授の日本語の美化語に関する研究に共同研究者としてデータのコーディングに携わるなど、様々な教員の先生方の研究に関わる機会を得ることが出来た。

②海外での経験

半年ほどの長期滞在による留学は派遣者にとって初めての経験であった。現地での生活という面では、シンガポールの多文化・多言語環境は日本とはほとんど正反対の世界であり、非常に刺激的であった。Singlish と一般に呼ばれる現地の英語は確かに全体として独特なイントネーションや語彙・文法を有しているものの、その中においても人種やバックグラウンドによってかなりの幅があり、その内部に複雑な体系を成していることを実感した。

指導教官が担当する学部生向けの授業にも参加させて頂き、海外での大学の授業を体験することが出来た。シンガポールは日本よりもはるかに学歴が重視される社会であるうえに成績評価も相対評価に基づいて行われるため、現地の学生たちは日本の学生と比べて学業に対してかなりシビアな姿勢を持っているという印象を受けた。

③プログラム内容

SEND 事業として現地での日本語教育・日本文化交流の機会を持つことが出来たことは、言語学を専門とする派遣者にとって言語に対する視点を一層豊かにしてくれるものとなった。漫画であれ音楽であれ、異文化を理解するための窓口となるものは言語であり、一方で言語を学ぶための原動力となるのは異文化を理解したいと思う意欲であり、文化への理解と言語は密接に結びついているものであるということを実感することが出来た。

④進路への影響について

一番大きな影響としては、修士課程卒業後アメリカの大学院に進学し、言語学をさらに専門的に研究するという決意の大きな後押しとなった。特に Sato 教授、Erlewine 教授には進学先や今後の研究の見通しに関して熱心に相談に乗って頂き、数多くの親身なアドバイスを与えて下さった。また今回の派遣は、語学力や専門的な知識など現在自分自身に不足している能力を痛感する大変良い機会となった。

また、SEND を通じて日本語教育に携わることが出来た経験は、派遣者の言語教育に対する関心をさらに深めることになった。海外における日本語教育に限らず日本における英語教育に携わる場合においても、今回得た授業工夫などの知見は今後参考になるはずである。